
新米探偵への挑戦状

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新米探偵への挑戦状

【Zコード】

Z6019E

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

父親から一時探偵事務所を引き継いだ西山彩菜は暇をもてあまし
ており、インターネットのニュースサイトで連続誘拐事件の記事を
読んでいた。読み終わり、大学のレポートを書き始めると一通の手
紙が彩菜に届けられた。

世間をざわした、十日で七名のものを誘拐したという連続誘拐事件があつた。

誘拐犯は今だ捕まつておらず、七名の家族に連絡がないことから拉致の疑いが強いと警察は考えていた。誘拐された七名の年齢や職業はまったく関連性がないという。警察は全力で捜査をしているが、いまだ手がかりがないらしい。

都心部から少し離れた都會の中の田舎にある一軒の家で、黒のショートヘアで頬は少し紅潮している女性がインターネットのニュースでその記事を読んでいた。

「警察もお父さんがいなくなつたらまるつきりダメね。」
「うう、計画犯罪に対する」

今から一ヶ月ほど前の紅葉が見じるの時期に、都心部を離れた場所に探偵事務所を構えていた西山乱夢という名探偵が、仕事の関係でロンドンへと向かつた。事件内容は一般に公表されなかつたから不明であるが、重要な事件でありもう何ヶ月も帰つてこないだらうとのことだつた。

乱夢は日本の重要な事件を解決し、警察からも高く評価を受けておりシャーロック・ホームズのように、警察の手にはおえない事件などが舞い込むこともよくあつた。乱夢がいなくなつてから、彼の事務所は娘の西山彩菜に引き継がれた。彩菜は大学に通いながら探偵業を行うこととなつたのだ。

その彩菜はたつたいま、インターネットのニュースを読み終わつたところだつた。

「はあ、こんな重大な事件が起こつても私のところにはなにも舞い込んでこなくて、平凡な毎日かあ」

彩菜は乱夢がいなくなつてからの探偵事務所を引き継いだはよかつたが、一向に依頼は来なかつた。もう一ヶ月もたつてゐるのに、

一件もだ。彩菜は心底退屈していた。

インターネットニュースを読み終え、暇になつた彩菜は椅子の横に置いておいたカバンを取り、プリントと筆箱を取り出して、レポートを書き始めた。

「手紙が来てるわよ、彩菜」

レポートを書き始めてから、十分も立たぬうちに彩菜の母である、西山鈴代が彩菜宛の手紙を一通持ってきた。

鈴代は乱夢がこの探偵事務所にいるときから一緒に経営していた。そして、彩菜が探偵となつてもこの事務所の経営を続けていた。もう、五十六歳であるがまだまだ元気である。髪には白髪などはまったくみられない。

彩菜は手紙を受け取ると、裏面を見た。差出人は誰かわからない。封を切り、中の手紙を取り出して読み上げた。紙はきれいな便箋だ。手紙の内容は次のとおりである。

西山彩菜様

テレビやインターネットなどのニュースで、七人が誘拐された事件が発生しております。この事件の犯人について私は知っております。なぜならば、それは私が犯人だからです。

七人の人物の命を預かっております。この者たちを救出させたければ、下記住所の屋敷に必ず一人でおいでくださいますようお願いいたします。

おいでくださったとき、私と勝負をしていただきます。この七人のものを無事に助けることができるかどうかを。それはあなたが来た日から人を殺していきます。

なお、こなかつた場合や警察に連絡した場合は、七名のものを殺害し私は逃亡させていただきます。

連続誘拐事件 犯人より。

読み終えると、少し冷えたお茶を飲んだ。

さつきまで読んでいた連続誘拐事件の犯人からの手紙だ。七人の命を救えるかどうかが今、彩菜の肩にのしかかっているのだ。乱夢ならここまでのプレシャーはわからないだろうが、彩菜にとっては探偵になつてからの最初の事件なのだ。プレッシャーがかかるのは当然であろう。

鈴代は彩菜の様子を察し、手紙を取り上げた。少し間があいてから鈴代は手紙を彩菜に返しながら言つた。

「行きなさい」

「え？」

「行きなさい。これは彩菜にとつて最初の事件であり、重要な事件よ。警察もあてにはできないの。あなたがこの七人の人たちの命を救つてあげなさい」

「大丈夫。私、ちゃんと行くから。不安だけど行かないつもりはないわ」

「そう、ならよかつた。じゃあ、早く準備して出かけなさい。この住所だと今からいかなきや夜になるわよ」

彩菜は筆箱などをカバンに押し入れ、部屋の奥にあるドアを開けて階段を上り、家へと入つた。

西山探偵事務所は、一階が事務所。二階が生活スペースになつており、彩菜の部屋ももちろん二階にある。彩菜は小さめのカバンを取り出し、中にペン類と手帳、手紙を入れて、外へ出て車のエンジンをかけた。

「じゃあ、行つてきます」

車の窓越しで鈴代に言つた。

「はい。気をつけるのよ」

彩菜は車を動かし、手紙の住所へと向かつた。

手紙の住所があつた場所は山奥だつた。東京からはずいぶんとはなれ今では暗くなり始めている。道は舗装されておらず、がたんがたんと音を鳴らしながら走つていく。

彩菜は車の免許を取得してから一年たつていたがこんな悪路を通りるのは初めてだった。

あたりの木々の葉はなくなつて、その姿をあらわにさせている。この木々も少し前は紅葉の見ごろだったのだろう。地面には数枚、赤い葉っぱが落ちている。

しばらく走らしていると屋敷のような建物が遠くに認められていた。車を走らせるにつれどんどんと屋敷が近づいてくる。

屋敷の敷地に入るには一本の橋を通らねばならないらしい。木造の橋で、重たい車が通れば壊れそうだ。橋の下には流れの速い川が流れている。橋から川への高さは一十メートルほどある。

彩菜は不安にならながらも先ほどまでのスピードよりもぐつと速度を下げて橋を渡つていった。橋を無事に渡りきり、屋敷の玄関らしき場所の前にある広いスペースに車をとめて降り、呼び鈴を鳴らした。

「三分待つただろうか。それぐらいしてやつと扉が開いた。

中から出でてきたのは、五人の男と一人の女だった。年齢はみなバラバラみたいだが、結構若そうだった。

「あんた誰だ？」

一番前にいる、体つきのよさそうな 何かのスポーツ選手だろうか？ 坊主頭の男が言つてきた。

「私は西山彩菜といいます。あなた方は誘拐された七名の方たちですか？」

「ああ、おれたち全員が誘拐されてここに來たんだ」

今度は坊主頭の男の後ろにいる田舎風の男が言つた。服装からして農作業中に連れ去られたようだ。

「私はあなた達を」

助けに來た。と、言おうとした時、坊主頭の男が喜びの叫びをあげたので、彩菜の言葉はさえぎられてしまつた。

「橋が架かってるじゃないか！ よつしゃ！ これでここから脱出だぜ！」

坊主頭の男は彩菜を押しのけ、橋へと向かつて走つていった。

「ちょっと！」

彩菜は怒つたように言つた。だが、坊主頭の男はそのまま橋へと走つていった。

「まあまあ、西山さん」

と、田舎風の男が、彩菜を慰めるように話しかけてきた。
「野村さんはせつかちな方なんですよ。一番、おびえていらした方ですし」

「だからって人を押しのけていきますか？」

「私たちはこんなところに閉じ込められていたんですよ。早くここから出たいんです。それは私たちも変わりません」

と、後ろのほうから女性が言つた。女性二人は後ろにいたのでどちらがいつたのかはわからなかつた。一人はショートヘアの女性で、もう一人はロングヘアの女性だつた。ロングヘアの女性は若い人が来てそうな服を着ている。

その時、彩菜の後ろから大きな爆発音が聞こえた。後ろを振り向くと橋の中央が焼けているではないか！

「消火器を持つてきて！」

彩菜はそう叫ぶと、橋に近づいていった。野村と呼ばれた坊主頭の男の状態を知るためにもあつた。時間的にちょうど橋を渡つたときだ。

橋は中央から激しく燃えており、どんどんと端へと火が移つていぐ。後ろから田舎風の男と学生風の男がやつてきた。

「あ、あれ！」

学生風の男は指さした。その先には何かが流れている。短く刈つている頭が見える。野村だ！ 野村が川を流れているのだ！

三人は岸沿いに野村を追いかけた。だが、頭をこちらに向けているだけであつたく反応がない。

「まずいわ。このままじゃ窒息死するわよ」

「でも、どうするんですか？ あいつを助ける術はないんですよ、

この状況じゃ

学生風の男は言った。すると、田舎風の男があせつたように言った。

「あそこ分岐点になつてゐるぞ！」

川の流れの奥にみえるのは二手に分かれたポイント。暗くて詳しく述べようがないかはわからない。

と、その時、野村の頭が水中に沈んでしまつた。もう死ににいるかわからない。彩菜たちは足を止めた。

「どこかに行つてしまつた……」

「橋のところまで戻りましょう。まだ、炎の勢いが収まつていみたいたから」

彩菜たちのところまで炎の光はかすかに届いていた。

幸いにも消火器が屋敷の中にあつたことから、橋の炎を消すことはできた。だが、橋は崩れ去りもう向こう岸にいけなくなつてしまつた。

彩菜を含めた七名たちは橋の近くに消火器を置き、岸沿いに歩いていった。他の橋があるかもしれない。その望みを託したのだ。その間に彩菜は、あの屋敷から外にでることはできなかつたといふことを聞かされた。窓には取り外しができない鎧戸がつけられ、通用口となる玄関と裏口の鍵は外からかけてあつたという。なんとも不思議なつくりだと彩菜は思った。

だが、彩菜が訪ねてきたとき玄関の鍵は開いていたという。犯人は彩菜が来ることを知つていてから開けておいたんだろうか？

岸沿いを一周した。だが、橋となるものは何一つなく、ここは外界と話された離島となつてしまつていた。彩菜は携帯電話を取り出してみたが、予想通り圈外だつた。

七人は屋敷の中に戻り、皆が全員入ることができる食堂に集まつた。

カーテンは引かれており、開けてみても鎧戸がついているため窓

を開けても外に出られないことを確認した。

食堂は洋風なつくりで、入り口からまっすぐのところにマントルピースがある。上の壁には古い柱時計がついている。床は赤のじゅうたんでこちらも古く色あせていて、テーブルにかかるブルクロスは綺麗だつたが、所々しみがついている。

「さて」と一番奥のテーブルのところに立つた彩菜は言った。

「改めて、私は西山彩菜といいます。ここに来たのは私の事務所に、

「どうということですか？　あなたになぜそのような手紙が来るんですか？　警察の方じゃないでしょうね？」

ロングヘアの女性が訊いてきた。

「そんな一辺に質問されても答えは一つですね。私は探偵なんです」「探偵だつて！」

学生風の男が思い切り立ち上がつた。まるで珍しいものを見るような目で彩菜を見ていた。

「どうかしましたか？」

学生風の男は正氣を取り戻したように、「なんでもありません」といつて席についた。

「あなた方を助けに来たのですが、先ほどの状況では戻る手段はありません。そして、この屋敷の中には私に手紙を送つてきた犯人がいる可能性もあるのです」

六人はざわつき始めた。彩菜はそれをとめさせて、続けた。

「こうなっては仕方ありません。私が犯人を探し出しながら脱する方法も探ししたいと思います」

「具体的にはどうするんだい？」

彩菜の右手にいる少年が言つた。めがねをかけていて、学ランの学生服の上にコートを着ている。

「とりあえず、自己紹介でいいのであなた方について知りたいので教えていただけませんか？　名前、年齢、職業などをお願いします」

「なんでそんなことをする必要があるんだよ」

「何か共通点があれば犯人を探し出しやすくなるかもしれませんからね。じゃあ、反時計回りで行きましょう」

「じゃあ、僕からか」と、学生服の男が言った。

「僕は、村山彰浩。年は十五で職業は学生。ちょうど受験シーズンだつて言ひのに迷惑な話しだよ」

村山がそう言つと、次は奥のロングヘアの女性が言った。

「あたしは、天城詠美。二十歳の学生よ」

その次は背広を着た紳士的な男性が言つた。

「オレは日下部洋平。三十五歳で、美術館を経営している」

テーブルを挟み、学生風の男が今度は言った。

「俺は辻風新次だ。年は二十で詠美さんと同じ。職業は特に決まっていない」

「フリーーターってことですか？」

彩菜がそう訊くと新次はうなずいた。彩菜は次のショートヘアの女性に促した。

「私ですか？ 私は、栗山飛鳥といいます。三十一の医者です」

次に田舎風の男が言つた。

「おれは山下祐次。年齢は一十六で、職業は農家だ」

「ありがとうございます」ざいます、皆さん。私も再度しておきますと、名前は西山彩菜といいます。年齢は一十一で、職業は探偵と大学生。一年留年をしていますけど」

彩菜はあたりを見回し、軽く会釈した。そして、続けた。

「まずあなた方に質問をしたいと思うのですがよろしいでしょうか？」

「どんなことを？」日下部が言つた。

「どんなことって もちろん、事件のことですよ。事件の解決をするためにいくつか質問したいことがあります」

「わかった」

「まず、 思い出すのはつらいかもしませんが どこで犯人に誘拐されたんでしょうか？ 今度も反時計回りで行きましょう」

彩菜は村山に視線を移した。村山は少し間を空けてから言った。

「僕の最後の記憶は学校から帰つてくるときだつた」

「どのようにして？」

「口をハンカチなんかで防がれた」

彩菜はうなずき視線を天城に移した。

「あたしも大学から帰つてくるときだよ」

「やはりハンカチで？」

「多分……。布みたいなので口を押さえられたとしか覚えてないわ。あたりは暗かつたし」

視線を口下部に移した。

「オレは美術館に向かつている途中だつた。同じくハンカチらしきもので口を押さえられた」

今度は辻風に視線は移つた。

「俺はバイト帰りだつた。ハンカチじゃなくて頭を殴られたがな」

「あたりは暗かつたですか？」

「ええ、暗かつたですよ」

今度は手前の栗山医師に視線を移す。

「私は病院から変えるときです。布類で口を押さえられました」

「おれは休憩中に背後から口を何かで押さえられたよ」

山下は彩菜の視線が移る前に言つた。

「ありがとうございます。もう一ついいますか？　どれくらいこちらにいるんですか？」

「たつた一日前からだ」

「あたしはちょうど一週間前だよ」

「十一日前だ。なあ栗山先生？」

「ええ、私も十一日前に来ました。それから数時間で口下部さんは来ました」

「俺は五日ほど前だつた思います」

「おれは九日ぐらい前だつたかな」

それぞれ、村山。天城。口下部。栗山。辻風。山下の順で言つた。

「わかりました、ありがとうございます。とにかく、野村さんはどうだったのでしょうか？」

「確かに村山君が来る前だったから、二〇日ぐらい前だったと思つが」

「山下がそう説明してくれた。

「そうですか、ありがとうございます。そして、これはもつとも重要なことだと思つのですが」

彩菜は少し間をおいてからいった。

「食事はどうされていたんですか？」

「この質問には他の人物は少し畳然としていた。急に事件に関係ないことが訊ねられたのだ。

「ああ、俺と栗山先生とで料理してました。隣に調理室があつて、そこに材料があるんです」

皆が畳然としている中、畳然とした状態でそう説明してくれたのは辻風だった。

「そうですか。ちゃんと材料があつたんですね。まだ残つてゐるんですけど？」

「ええ、まだ残つています。この分だと後二週間は持ちますよ」「わかりました。さて、とりあえずこれだけ質問をさせていただければ十分です。じゃあ、これからどうしましようか？」

彩菜は時計を見た。もう十一時をすぎている。あたりはその投げかけに対しても返答をしなかつた。

「じゃあ、もう寝ましょう。皆さんはどうで寝ているんですか？」

「あたし達には一人ずつ部屋が割り当てられてるのでそこで」

そう説明したのは天城だった。

「じゃあそこにみんなで行きましょう。ああそれと、単独行動は控えるようにしてください。犯人がこの屋敷の中に潜んでいる可能性がありますからね。朝は皆さんを起こしにいきますのでそれまで勝手に部屋の外に出たりしないでください。それと、鍵はちゃんとかけておいてくださいね」

彩菜はそう言つと、立ち上がり部屋に行こうとジロスチャーした。

廊下にも赤のじゅうたんが敷かれている。窓といつ窓はカーテンを引かれており、開いても鎧戸がついている。

部屋街は廊下を隔てて隣同士になつており、数は七部屋しかなかつた。

まず、部屋を出ると田の前に遠くまで見える廊下が現れる、唯一、隔てた先に廊下しかないのが山下の部屋だ。その隣を行くと口下部。天城。村山の部屋へと続き、村山の前の部屋は野村。辻風。栗山医師の順番となる。

部屋順を覚えた彩菜は栗山医師の部屋へと入つた。

彩菜の部屋がなかつたという理由でもあるが、本来の目的は朝、迎えに行く必要があるということにある。

野村の部屋を使つてもいいのだが、朝、皆を起こすときに単独行動になつてしまつ。その機会を犯人は逃すことはないだろう。それを防ぐため、彩菜は誰か一人と同じ部屋に入ることにしたのだ。女性の彩菜は栗山医師か天城の部屋となるのだが、栗山医師が快く進めてくれたので栗山医師の部屋に泊まることになつた。

波乱の一日の闇はさらに深まつていつた。

翌朝、彩菜が起きるとすでに栗山医師は起きており、何か手帳に書いていた。

「おはようございます。なにを書いているんですか？」

「おはよう。これはね、私がここに誘拐されてからのことを書いてるのよ」

「見せてもらつてもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

栗山医師は書き途中の手帳を彩菜に渡した。手帳にはこれまでのことを立証することが書かれており、ここに来た人がいつなかもまだちゃんと記されていた。昨日の野村の死にもついて書いてあつた。だが、証言を立証しただけでこれといった手がかりはなかつた。

彩菜は手帳を返し顔を洗つてから一人で皆を迎えて向かつた。皆、無事に部屋から出てきたので全員そろつて食堂へと向かつた。

食堂に着くと昨日と同じ席順にし、彩菜と栗山医師、辻風は調理室へと向かつた。朝食の準備をするのである。

調理室はさほど広くはなかつた。一般家庭の台所が少し広くなつたような場所だ。食材はすべて冷蔵庫に入れるものは冷蔵庫に入れなくてもいいものは机の上にとあつた。

栗山医師は水場の近くで卵をフライパンにいれ目玉焼きを作り出した。辻風はパンをトーストにしている。彩菜は手伝うつもりだったが、他の二人がてきぱきしているのでやることがなくなつていた。しかし、手伝いためだけに来たのではなかつたのでそちらのほうに力を入れた。戸棚の中を調べたり冷蔵庫の中を調べたりした。

戸棚の中にはたくさんの中にはたくさんの食器やお椀がある。さほど高級なものではない。冷蔵庫の中には食器がちゃんとそろつており、綺麗に整頓されている。この分なら本当に一週間は持ちそうだ。

調理器具が入っている戸棚には、フライパンやらボールやら必要な不可欠な調理器具が置いてある。包丁も壁にかかっており、ハ本置いてあつた。

一通り調べが終わると、食事もちょつじできていた。皿の上にはトーストと目玉焼き、ハムエッグなどが乗つていて、彩菜は何もしなかつたので盆に皿をのせ運ぶのをした。食堂はすぐ近くなので何の問題もなかつた。

食事中は会話はなかつた。皆、静かに食べている。皆が食べ終わり食器を片付けるため、席を立ち上がつた彩菜は言った。

「それじゃ食器を片付けますね。ああそれと、この後手荷物の検査をさせていただきたいのですがいいでしょうか？」

「なんでそんなことをしなきやならないの？」

天城が少しつらついた口調で言つた。

「昨日の質問と同じ回答ですよ。じゃあ、まずは食器を片付けます

から待つていてください」

彩菜たち三人は食器を調理室に持つて行き洗い始めた。その途中に辻風は彩菜に質問をしてきた。

「なあ、探偵さん。これは事件なんですねよね？」

「ええ、連續誘拐殺人事件つてところかしらね。でも連續殺人はさせないわ」

「探偵さんには助手はいりません」

「事務所にそんな役に立つ人はいのよ。お父さんも一人でやつてたし」

「お父さんも探偵なんですか？」

彩菜は乱夢について説明した。すると、辻風は感嘆の叫びをあげた。

「そんな大声出さないでよ」栗山医師が辻風に注意した。

「すいません。まさか、乱夢探偵の娘さんだとは思いもしませんでしたよ」

「まだまだ、新米探偵だけどね。ほら、口を動かしてないで手を動かしなさい」

辻風はそういわれ止りがちだった手を動かし始めた。それから数分沈黙が続いたが辻風はその沈黙を破った。

「探偵さん。助手がいらないなら俺を助手にしてくださいよ」

唐突だった。彩菜は驚き一枚の食器を割つてしまつたほどだ。あせつて破片を拾おうとしたが栗山医師が辻風との話しに決着をつけろといつてきたので、破片拾いは栗山医師に任せた。

「どういうこと？」

「俺を探偵さんのワトソン役にさせていただきたいんですよ。まあ、

「みたいに小説はかけませんが」

「なんで、ワトソン役にりたいと思うの？」

「俺はこう見えても推理小説だけは読んでいましてね。事件に関して結構興味を持っているんですよ。だから、この事件の真実をこの目で知りたいんですよ」

彩菜は少しためらつてから言った。

「ダメよ。推理小説なんて所詮、本の世界じゃない。実際の事件とは違うわ。ほら、手を動かす。私だって忙しいんだから」

食器の片付けが終わり、彩菜たちは食堂に戻った。彩菜は手前の入り口近くにいる日下部の部屋から調べることにした。

日下部の部屋は栗山医師の部屋とまったく同じつくりだった。どうやら、部屋の造りはどの部屋も同じなのかもしれない。

入り口を入つてまつすぐ行くと窓がある。右にはベッドが置いてある。枕の上にはスタンダードライトが置いてある。その近くには小さいテーブルが置いてある。すべて栗山医師の部屋と同じだ。

入り口をまつすぐ行く途中には洗面台への入り口があり、ドアを開ける必要がある。

彩菜は持ち物のが入つているカバンを日下部から渡された。黒のカバンで、中には書類や鉛筆などの筆記用具がある。他にはメガネやら手帳やらしか入つていなかつた。

次に天城の持ち物を調べた。やはり部屋の造りは同じだつた。持ち物のカバンに入つているものは教科書類と筆記用具。それと、携帯電話とイヤホンが入つていた。

村山の持ち物は、バッグに入つていた教科書や筆記用具などの文房具だつた。受験生といふこともあり参考書が何冊か入つている。

「これは？」

彩菜は意外なものをその中から見つけ出した。携帯電話のような形なのだが携帯電話ではない機械だ。

「ああ、それはPDAだ。携帯型パソコンみたいなもの」

次は山下の持ち物だ。だが、農作業中の休憩中に誘拐されといふこともあり持ち物は何一つなかつた。あるものはタオルだけだ。

次の栗山医師の持ち物は、事件を記した手帳のほかに筆記用具、書類　医療関係の書類だ　しか入つていなかつた。

最後の辻風の持ち物は、一通の封筒と財布だけだつた。封筒は給料が入つていたという。

一通り部屋を見終わった彩菜は食堂の椅子に座つて考え込んでいた。特に共通点もあるわけでもないし、殺せそうな道具も持っていない。持つても隠し持つているのだろう。

彩菜が考えていると、山下が話しかけてきた。

「西山さん。おれをここから出させてくれよ」

「え？ ああ、じゃあ誰かと一緒に」

「それがいやなんだよ。単独行動を許可してくれ

「なんですって！」

彩菜は思わず立ち上がった。皆が彩菜に注目した。

「山下さん、それがなにを意味しているかわかつていいんですか？ 殺されるってことですよ」

「でも、何もなかつたじゃないか。あの野村さんの死から」

「まだ一日もたつていません。何が起ころかはまだわからないんですよ！」

「こんなところに閉じ込められていたくないんだよ。こんな息苦しいところにな

「だからといって

「もういい。勝手に行動をとらさせていただきます」

山下はそういうて食堂を出て行つた。すると、辻風が言った。

「いいんですか？ 単独行動をして？」

「ダメに決まってるでしょ。あの人は勝手に出て行つたのよ」

「なあ、探偵さん」と、山下部が言つた。「部屋に戻つていいかね？」

「ええ、もういいですよ。じゃあ、誰か」

「なに、一人で大丈夫だろう」

「だから、それがいけないんです」

「だったら、あたしがいくわ」

そう申し出たのは天城だつた。天城も部屋に戻りたいから、一緒にいくという。すると、辻風を除いたほかの人たちは自らの部屋へと戻ることを志願した。彩菜はそれを許可し、鍵をかけるよう命を

押した。

「で、あなたはどうするの？」

皆が出て行つた中で一人だけ椅子にすわ待つたままの辻風がいた。

「俺は探偵さんについていくよ。事件の真相を知りたいからな」

「だから、ダメだつて言つたでしょ」

彩菜は少しきつく言つた。だが、辻風は動じなかつた。

「じゃあ、俺をここに一人残すんですか？ あなたがあれほど単独行動はダメだつていつたのに」

痛いところをつかれた。部屋に送り届けてもどの道ついてくるんだろう。彩菜はあきらめ、辻風新次と共に行動することにした。

「ありがとう、探偵さん。力になれることがあつたら力になるよ」

「もう、なんてずるがしこいんだか。じゃあ、あなたはこの事件をどう思つ？」

「どう思つって言われても……」

「犯人は誘拐された人物の中にいると思う？ それとも外部犯だと思う？」

「外部犯でしょ」新次は即答した。

「状況的にはその可能性が高いわね」

少し間を空けてから彩菜はそつづぶやいた。しばらく間をおくと

彩菜は言つた。

「行きましょう」

「どこへ？」

「まだ調べてない部屋があるの。そこによ」

彩菜は食堂を後にした。新次もその後に続く。

彩菜が入つた部屋は野村の部屋だつた。川に落ちたあの野村だ。

野村の部屋も造りは同じだつた。早速持ち物を調べてみると、水着やゴーグルなどの水泳道具が入つていた。さらに調べてみると、一番奥に市販で売つてているバウムクーベンより少しばかり大きい金色の輪があつた。

「どうやら水泳の選手だつたみたいですね」新次が言つた。

「この輪は水泳を使うのかしら？ 私は使わないけど」

「いや、多分使わないと私は思います。水泳に関係ないのでは？」

彩菜はそれらをバッグに戻し部屋を後にし、外の橋のところへ向かつた。

橋はほぼ完全に焼け落ちていた。ジャンプして対岸に届く距離ではない。橋をささえていた柱は焼けてはいたものの倒れてはいなかつた。

「これといった手がかりはなさそうですね」

「ええ。これだけ焼けてたら何もみつからないか……。何かあればいいなあと思つたんだけど」

「これからどうしますか？ 屋敷に戻ります？」

「いや、岸沿いをまた回つてみましよう。前見たときは夜中だつたから何か見落としていたものがあるかもしれないわ」

岸沿いを半周した時、川へと入ることができる場所が一角あつた。だが、肝心の対岸にそのような場所がないため、ここから入つて泳ぎ出せば水に飲み込まれてしまうだろう。

その場所に山下は一人ぽつんと座つていた。

「山下さん、こんなところで何をしているんですか？」

彩菜は自分達に気づいていない山下に話しかけた。山下は絶望したような表情をみせていた。

「ああ、探偵さんか……。いや、出口がないかを探していたんだよ。昨日は夜だつたか何かを見落としているかもしないと思つて」

「そうでしたか。実は今、私たちもしているかも知れないと思つて」

「そうか。でも、意味ないよ。何も対岸に行く術はなかつた」

「でも、何かしら対岸に行く方法はあるはずですよ」と、新次は山下を慰めるように言つた。

「どうしてそういういきれるんですか？」

「だって、犯人が脱出するためのルートがあるはずなんですから」

「そもそも限らないわよ」

新次の発言に対して、彩菜は間髪を入れずに言つた。

「どうしたことですか？」

「犯人が必ずしも逃走するとは限らないって訳よ。ここで全員、死ぬのかもしないわ。あの有名なクローズド・サークルの作品と同じようにね」

新次はその作品の名前はわかつたが、特に発言はしなかつた。発言したからといって何かがあるわけでもない。

「じゃあ、犯人を捕まえてどこから出られないわけですか？」

「そういうことになるわね。だから、そうならないためにも脱出方法も考えているんじゃない。まずは恐ろしい犯人を捕まえてからだけどね」

「あの」と山下は彩菜にむかって言った。

「本当に脱出する方法がないとお考えですか？」

「え？ ええ、今のところは」

「可能性が低いものですか？」

「可能性が低い ああ、そういうえば一個ありますー。」

彩菜は感嘆の叫びをあげた。

「辻風君。調理室に空のボトルはある？」

「空のボトルですか？ ペットボトルでもいいならありますけど

」

それが何か。と、言おつとしたが彩菜が山下にむかって話していたのでいうのはやめた。

「早くボトルを取りに行きましょー！」

彩菜は橋のところまで戻るなり歩み始めると、山下はそれをとめた。

「こちらに裏口があります。そっちから行きましょー」
「裏口が？」

裏口は川へと入れる場所からまっすぐ行つたところにあつた。昔からある屋敷のようだから、川へ洗濯するためにこの裏口をこの場所に作り、川への道も作ったのだろう。

裏口のドアノブに山下が手をかけると「あれ？」とつぶやいた。

どうしたのかと訊ねると山下は言った。

「いや、ノブがぬれているんですよ。出て行ったときはぬれていなかつたんですが」

「ぬれた手で触ったんじゃないですか？」新次が言った。

「いや、おれは出てから一回もこの入り口に近づいてないからそんなことはないんだが」

「じゃあ、誰かがここに手をかけたんでしょう。他の人たちもあなたのせいで単独行動に近いことをするようになつたんですからね」これも新次が言った。彩菜は先ほどから何かを考えている様子で、何も口にしない。

山下はさぞ悪いことをしたと詫び、墨敷の中に入つていった。調理室であつたペットボトル五本を手にし、栗山医師の部屋へと向かつた。

ペンと手帳の紙を貸してもらい、SOSを示す言葉を書き水が入らないよう簡単に加工したペットボトルに詰め川に流した。

その日の午後、外では雪が降り始め一段と気温が下がり始めた。彩菜は栗山医師の部屋でずっと考えことをしていたので、ずっと部屋に閉じこもつていた。闇が空を完全に覆つた時、彩菜たち三人は他の人のドアをノックし呼びにいった。最初に呼びに言つたのは村山だった。村山は彩菜にいた。

「あ、そうだ。田下部さんは調子悪いとかで今日の夕食はバスするつて言つてた」

彩菜たちは田下部の部屋だけノックせずに、他のものの部屋をたたいた。しかし、誰も出てこなかつたので彩菜は不安になつたが、先に食堂に行つたのではないかという結論に達して、食堂に向かつた。案の定、食堂には彩菜たちと田下部を除いた全員がすでにいた。食後に彩菜は再度鍵をちゃんとかけるように口に言つた。わかっているとは思つていたけれど、単独行動をするよになつたから再度念押しをしたのである。その時、八時を告げる時計が鳴つた。

翌日、外は白銀の世界へと移り変わっていた。はげた木には雪が覆いかぶさり白い木を作り出している。川は一段と冷たくなり、入つたら凍え死んでしまいそうだ。天気も曇りだ。雪溶けはまだまだ先だろ。」

「日下部さん！　日下部さん！」

皆を起こし終わつた彩菜たちだが、日下部だけがいくらドアをたたいても反応がない。当初は新次を起こした後に起こしにかかったのだが、なかなか起きないものだから後回しにした。その後回し後にも日下部は出てこない。ドアノブをいくら引いても鍵がかかつており開けることはできない。

不安になつてきた彩菜は、ドアを壊すことを決意した。幸いにも力強そうな山下と新次がいることから、一人にドアに数回タックルしてもらいドアを破壊して内部に入つた。

彩菜は自分以外のものを部屋に入れないようゆつくりゆつくりと中に入つていく。中に日下部はいた。だが、その胸辺りには包丁が布団の上から刺さつている。脈を図つてみたが止まっており、彩菜は首を振りながら栗山医師を部屋にいた。

新次が中に入らないで食堂に待つていうよつ皆に言つと、しぶしぶと食堂へ向かつた。それが終わると新次は中に入り、二人の様子を観察していた。

「結構、冷えていますね。死後、相当の時間がたつています」

「半日ぐらいですか？」

「ええ、半日ぐらいですね。もしかしたら前後しますが」

彩菜は携帯の時計を見た。七時三十分だつた。

彩菜は窓を調べてみた。鍵がかかっている。鍵を開けても鎧戸はずされてもいないし、はずされた形跡もない。他の部屋に窓はないから、この部屋は密室になっている。

ほかにあたりを調べてみた　時々腹ばいになりながら　が、

何もこれといった痕跡は残つていない。日下部の血液は布団にすべ

て染み付いており、じゅうたんには染み付いていない。

刺さっている包丁は彩菜のみならず栗山医師にも、調理室にある包丁であることがわかった。昨日の調理室にはちゃんと八本とも包丁は残っていたので、深夜に持つていったものと思われる。

食堂に戻る前に調理室に行つた彩菜たちが目にしたのは包丁が七本になつていてことだつた。確認を終えると、食堂に戻り彩菜は密室殺人になつていたことを告げた。事実を知らない全員が動搖した。「落ち着いてください。私の忠告に従つてください。もうあなたの方の誰かを死なせたりはしません」

彩菜は全体を見回してから続けた。

「明確ではありませんが、死亡推定時刻は昨夜の七時半ごろ。ということは、私たちがちょうど食事をしていた時間帯です。つまり、あなた方にはアリバイがあることになります。ということは、あなたの方の中に犯人はいないということになります。食事中は誰も退席しませんでしたからね。

よつて、この事件の犯人は外部犯になります。それだと、この密室殺人は容易になります」

「どういうことですか？」天城が訊ねた。

「犯人はこの屋敷を用意しました。つまり鍵は犯人が持つているのです。ということは、いくら鍵を閉めようが無駄ですし密室にすることは容易です。

そこで、あなた方に気をつけて欲しいのは、今日から単独行動は絶対しないこと。寝るときは鍵をかけ、ドアが開かないよう重たいものを立てかけて置いてください。 そうですね、部屋には小さいテーブルがありますよね？ それと椅子を使ってドアを押さえてください。そうすれば大丈夫でしょう

一通り説明が終わると、食事の準備を始めようとしたが、皆が食欲がないというので作るのをやめた。朝食を抜きになつた彩菜は新次を連れて調理室で、パンを一枚ほどかじつた。

「よく食欲がありますね……」

新次は一枚目のパンを持ちながら言った。

「これから私と辻風君は動かなきやならないんだから、ちゃんと食べておかないとね」

「どういうことですか？」

「外部犯となつた以上、犯人はこの屋敷の中に隠れてるのよ。犯人を捜すのよ、この屋敷中を一人でね」

だが、それは無駄に終わつてしまつた。屋敷は広かつたが、部屋数はさほど多くなかった。ほとんどが大きい部屋ばかりで、隠れるところもあまりない部屋ばかりだったのだ。彩菜は隠し扉などがあるんじゃないかと考慮を入れたが、そのようなものはまったくなかつた。

地下室には鍵部屋があつた。しかし、鍵は一本も残つておらず、錆びているバウムクーヘンを少し大きくしたようなリングがかかつていた。

あつという間に夕暮れになり、夕食時となつた。さすがに食欲はなくともおなかはすいてきたので、食事を取つた。八時を知らせる音が鳴ると、皆は自分の部屋へと戻つていた。彩菜は念押しして、朝言つたことを再度言つた。

片付けを調理室でしていると、新次は皿を落とした。

「ちょっと、何やつてるのよ」

彩菜が言つた。新次は「ごめん」「ごめん」といしながら、割れた破片を拾つた。その動きはどこか鈍く、疲れきつていふうだつた。

「どうやら、疲れてるみたいね」

その様子を見ていた栗山医師が言つた。

「ごめんね、辻風君。今日はつき合せちゃつたから」

「いえいえ、大丈夫です」

新次は強がつていたが、やはり疲れていた。彩菜は破片を拾つた手伝いとつと片付けを終わらせ、部屋街へ向かつた。

いつも通り、新次が部屋に入るのを見届けていると、新次が部屋に鍵がかかっていると言つ出した。彩菜は目を細くし新次が開けよ

うとしているドアの部屋が新次の隣の部屋であることがわかつた。

「辻風君。そつちはあなたの部屋じゃないわ。手前の部屋よ。」

彩菜は手招きをしながら、手前の部屋が新次の部屋であることを

「あ～？ そういぢつた

「そうよ。早く部屋に入つて寝なさいよ」

新次は疲れきつた足取りでドアを開けるとすんなりとあいた。彩菜はドアをテーブルなどで押さえるようにすることを忘れていそうだったので、新次にそのことを告げた。

始めた。

一 もしかしたら
いぢで
しかし

采葉はひらめいたがのよに栗山医師に小さな声で新次の部屋で泊まるということを告げた。ちゃんと、鍵等をかけるように言つておいて、新次の部屋に入り、事情を説明した。

食堂の時計が零時を知らせた。部屋街に忍び足で歩いているものがいた。ポケットはちゃらちゃらと小さな音を鳴らしている。ある部屋の前で止るとポケットから一本の鍵を取り出しへドアを開けた。ドアはすんなりと開き、ベッドに忍び足で歩み寄った。

そして、鍵が入っていないポケットからタオルに包んだ包丁を取り出した。その包丁を右手に持ち膨らんでいるベッドの上にそれを刺したではないか！

その時、部屋の光がぱつとついた。包丁を持っていた男は後ろを振り返ると、そこには二人の男女が立っていた。男は眠そうな顔をしているが、女のほうはまだ十分起きていた。男は眠そうな顔を

「あなただけたんですね。この連続誘拐殺人事件の犯人は野村さん！ あなたです！」

包丁を刺した男の正体。それこそ、彩菜と最初に会ったときとは

違う服装をしているが橋から落ちて死んだと思われた野村であるのは間違いなかつた。

「なにを言い出すんですか？ おれは間違えてここにきてしまったようですね」

あきらかにその声は動搖していたが、何とか沈めようとしていた。「いや、間違いじやありませんよ。あなたは辻風君を殺しにきたんでしょ？」

「なにを言つてるんですか、探偵さん。おれは間違えて」

「もううそをついてもダメです。あなたが包丁を布団の上に刺したのは私と辻風君がちゃんと見ました。殺人未遂で送検されるでしょう」

野村はしたうちをすると包丁を抜き出し、彩菜と新次に向かつて走り出してきた。新次はあらかじめ彩菜に持たされていた小型の時計を野村の顔に投げつけた。

野村は痛がり、足を止めた。それを彩菜は見逃さず、包丁を落とさせて新次に野村を押さえつけさせた。

「今ので完全に送検されますね、野村さん」

「なぜ、おれだとわかつた？」

野村は彩菜を無視していった。

「辻風君は最初から野村さんが怪しいと思つていたと思つているかもしれませんが、推理小説の名探偵たちのように私はさつきまで野村さんが犯人だとは思つていませんでした。

順序正しく説明しましょ。まず、野村さんの荷物の中には、水泳競技用の道具。これはあなたが水泳選手であることを示していました。あなたの体つきからしてもそうでしょうね。ということは、あの川の中に落ちても生きている可能性はあるわけです。あなたが燃えている姿を見た人はいませんしね。それによく考えたら、人は沈むことはなく浮かんでくることが多いでしょう。

流れたあなたはおそらく、中流か下流にあるであろう小屋か何かに入り暖をとつたでしょ？ この寒い冬に川の中へ入つたんですか

ら体は相当冷えていたはずです。その小屋にあるはずですよ、私が
あつたときについた服がね。もしかしたら、爆弾の起動スイッチ
もあるかもしませんね。まあ、この小屋というのは証拠がないの
で、確信は持てませんが、どこかであなたが暖をとったのは確かな
はずです。

暖を取つたあなたは屋敷に戻つてきた。橋がないので行き来する
ことはできやしませんが、屋敷に行くことだけはできます。裏口の
近くにあつたあの川に入る場所を利用すれば。川に飛び込みその場
所から岸にあがつたんでしょうね。屋敷に入るには裏口から入つた。
そのときについたのが、山下さんが言つたあのぬれたドアノブです。
つまりあの状態であなたは屋敷に戻つてきていたんです。

次にまたしてもあなたの荷物にあつた金色の輪。今日、地下室に
ある鍵部屋をみせていただきましたが、そこにはあなたの荷物の中
に入つていたのと同じくらいの輪がありました。残念ながら錆び
ていたので色まではわかりませんでしたが。あなたは鍵を外に
持ち出す必要があった。屋敷の中においておいては安心できません
から、私が調べるかもしれないとな。しかし、鍵輪は大きすぎてあ
なたは外へ持ち出すことができなかつた。そこで、バッグの奥にし
まい込んだんでしょう。

屋敷に戻つたあなたは自分の部屋に入りバッグの中をみてみた。
そのときに輪が動いていればすでに部屋は調べられ動いてなかつた
らまだ調べられていないことがわかります。そのため輪は
バッグに入れていたんでしょうね。輪が動いていればその部屋はほぼ
安全であるのが確実だし、輪が動いていなければまだ部屋を調べら
れる可能性があることがわかるようにしてました。見てみると
動いていたのであなたはそこで休むことにしました。

しばらくすると、廊下が騒がしくなつたのに気づきました。それ
は私たちがみんなを呼びに行つている光景でした。そこで村山君の
声を聞いたんでしょう『日下部さんは調子悪いとかで今日の夕食は
パスするつて言つてた』というのをね。あなたは絶好のチャンスに

恵まれた。だが、凶器をそのときは持つていなかつた。包丁は調理室のを使わっていましたからね。だから、あなたは私たちがいなくなるのを見計らつて包丁を抜き出し、鍵を使って田下部さんの部屋に入り込んで殺害したんです。

その後はちゃんと鍵をかけて自分の部屋に戻るだけでいいです。次の機会を待つばかりです。

だけど、今日はそのチャンスがなかつた。チャンスがなかつたあなたは深夜になつてから部屋に忍び込み、こうして殺人を行うつむりだつたんです

正直なところあぶなかつたですよ。辻風君があのボケをかましてくれなかつたら、辻風君は生きていなかつたかもしません

「どういうことですか？」

新次は驚きの声で訊ねた。彼の目は眠気がふつとんでしまつてパツチリと開いている。

「あなたは隣の部屋を開けようとしたでしょ？　あの部屋はあなたの部屋ではなかつた。野村さんの部屋だつたのよ。野村さんの部屋に鍵がかかっているはずはないわ。それで私は今説明したとおりのことを考えた」

「でも、今のは全部状況証拠ですよ？」

「ええ、そんなことはわかつてゐるわ。証拠はないのよ、何一つ。だから、こうしてかまををかけたのよ、殺人現場を見ようつてね。ついでにいうと、野村さんはさつき私のことを『探偵さん』つて言つたわよね？　私は野村さんに向かつて探偵なんて一言も言つていなかつたわ。この時点では状況証拠としては完璧ね

物的証拠を私は持つていなけれど、警察はきっとちゃんと見つけてくれるわ。この屋敷の持ち主が誰なのかとか指紋を調べたりしたら、すぐ見つかるもの」

彩菜は一息つくと野村に問いかけた。

「最後に聞いていいかしら？　動機はなんだつたの？　この殺人を犯すに相応する動機は？」

「復讐さ。親父の仇をとるために。お前もそつだが、野村は新次に指差した。

「他のやつらもみんな、親父を罠にはめて金を持つていきやがった。親父は働いても働いても金がたまらなかつた。そして、親父は過労死で死んじまつた。おれは親父の復讐をするため、そいつらを探した。だが、みんな死んじまつているつていうじゃないか。おれはいやでも復讐をするために、その子供たちをここに集め、殺すつもりだつた」

その後、彼が言つたのはなぜ探偵を呼んだかということだった。野村が長々と言つ出したので簡単に説明することにする。

野村の父、野村博は昔、登山をしているときに遭難したそつだ。その時に同じく遭難した西山乱夢があり小屋でその晩を過ごした。翌日、ふぶきが緩まり軽く視界が開いてるときに乱夢は外に出て行つたそうだ。博はそれをとめたのだが、乱夢は聞かずそのまま行つてしまつた。

それから、半日ほど立つとふぶきは強まつてしまつた。博はその場に取り残され、孤独な思いをしたそつだ。それから数日して彼は救出されたが、博は乱夢が許せなかつたのだといつ。自分ひとりで行つてしまふなんて……。

それを聞いた彩菜は逆恨みだと主張した。だが、野村にその言葉は届かなかつた。

それから野村を含めた、七名は川へと流したボルトを発見してくれた人が救助隊を呼んでくれたおかげで屋敷から脱出することができた。

野村は全員を殺したら、自分も死ぬつもりだつたといつ。だから、脱出ルートは考えておらずあつたとしても川のトリックしかなかつた。その川トリックも他の人たちには使えないの、救助隊を彼らは待つてゐるしかなかつたのだ。

警察が屋敷を調べる必要はなくなつた。野村がすつかりと事情を

話したからである。日下部の殺害も。七人を殺害しようとしたこと
も。彼は今後、つらい人生を送ることだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6019e/>

新米探偵への挑戦状

2010年10月8日15時12分発行